

愛媛県立松山南高校

外部人材の活用

教師志望の大学生を支援スタッフに起用。

教師・生徒・大学生がWin-Win-Winになることを目指す



学校概要

- ◎設立 1891 (明治24)年
- ◎形態 全日制・定時制/普通科・理数科/共学
- ◎生徒数 1学年約350人 (全日制)
- ◎2022年度入試合格実績 (現役のみ) 国公立大は、東京大、横浜国立大、名古屋大、大阪大、神戸大、岡山大、広島大、愛媛大、九州大、愛媛県立医療技術大などに276人が合格。私立大は、東京理科大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西学院大などに延べ701人が合格。

変革の背景

教師の業務負担軽減を図るため、
県の施策として支援スタッフを配置

県を代表する伝統校である愛媛県立松山南高校は、これまで様々な先進的な取り組みにチャレンジしてきた。SSH(※)は、2002年度の第1期から5期連続で指定を受け、第4期からは、理数科のみだった事業の対象を普通科にも拡大。生徒は、国内外の科学系コンテストで、数々の優秀な成績を収めた。21年度からは、愛媛県の進路指導研究指定校として、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の実現を図っている。

生徒の進路実現のため補習なども充実させ、「国公立大学に250人、難関大学に20人が現役合格」という目標を、20年度入試から3年連続で達成した。しかし、それらの様々な取り組みは、教師の熱意に支えられており、多忙化の解消は長年の課題だった。進路指導課長の松田猛先生は、次のように語る。

「愛媛県人は郷土愛が強く、教師の多くは県内出身者です。学校は地域や保護者から大切にされており、教師は仕事にやりがいを感じています。ただ、地域や保護者からの期待に応えようとすると、頑張り過ぎてしまう教師は少なくありません」

そうした同県の学校が抱える課題を踏まえ、愛媛県教育委員会は、2つの制度を導入

した(図)。1つは、21年度に導入した「ICT教育支援員(以下、ICT支援員)」で、ICTに詳しい外部人材が、端末の整備や、情報の授業の補助などを担う制度だ。もう1つは、22年度に導入した「大学生スクールサポーター(以下、サポーター)」で、教職に関心のある大学1・2年生が、生徒の学習や教師の業務などを支援する制度だ。生徒の学力向上や教師の業務負担軽減、教師を目指す人材の確保と育成がねらいとなる。ICT支援員は週16時間、サポーターは週14時間の勤務で、地方公務員として給料が支払われる。

22年3月、新年度開始が迫る中、その2つの制度を活用するため、急ぎよ取りまとめ役となった松田先生が思い浮かべたのは、自身

* 文部科学省「スーパー・サイエンス・ハイスクール」の略。

図 ICT教育支援員、 大学生スクールサポーターの概要

目的 1人1台端末の本格運用によるICTの活用や、新学習指導要領の「情報I」の実施を踏まえ、ICTにかかわる教師の負担軽減のために配置。

主な業務 ①1人1台端末の活用支援、端末の整備、日常的なトラブルへの対応 ②授業時（主に「情報I」）の端末の操作における生徒に対する支援等 ③ICTの活用における教師に対する支援（活用方法の助言等） ④オンライン授業等における機器や接続の準備等

資格 年齢・資格の制限なし。高度な知識・技能を有する必要はないが、パソコンの基本的な操作ができること。

目的 教職に関心のある大学生が、生徒の学習支援や教師の事務作業等の補助に従事することにより、教師の業務負担軽減と生徒の学力向上、教師を目指す優秀な人材の確保を図る。

主な業務 ①放課後等の生徒の自主学習の補助 ②授業時の教師の補助 ③進学・就職の面接指導の補助 ④学校行事や模擬試験監督の補助 ⑤教師の事務作業の補助

人員 1校あたり5人（2022年度は6校に計30人）

資格 県内在住で、教員免許状の取得可能な愛媛大学、松山大学に在籍し、教師を志望する1・2年生。

注）松山南高校では、大学1年生は大学生活に慣れていないことを考慮し、2年生のみに依頼した。

※学校資料を基に編集部で作成。

する教師への支援や、教科・情報の授業における生徒への支援などだ。ICT支援員は、授業への助言をしてくれる心強い存在だと、家庭科・情報科担当の徳本みはる先生は語る。

「『情報I』の授業では、ICT支援員は、私とのチーム・ティーチングで課題に行き詰まった生徒を支援してくれています。そして、生徒の理解が不十分だった点や、私が気づけていなかった生徒の様子などを、授業後に報告してくれます。それは私にとって、生徒への説明の仕方を変えた方がよいか、別の教材を使うべきかなどと考えるきっかけになり、授業改善につながっています」

ICT支援員の東野亨省（こうせい）さんは、自身の役割を次のように話す。

「教壇に立つ先生からは見えないパソコンの画面が、教室の後ろに立つ私は見ることができするため、画面の状況から、生徒が何に戸惑っているのがよく分かります。そこで、先生が見えていない生徒の様子をつかみ、それを先生に伝えれば、先生の授業改善に役に立つのではないかと思ひ、生徒の状況をノートに書き留め、具体的な改善策も考えて、先生に報告することにしました（P.30写真）」

サポーターの仕事は、生徒の学習支援や、課題プリント・小テスト等の教材作成の補助、授業・学校行事等における教師の補助、休日

変革の一手

支援スタッフが授業のサポートに入り、 教師の授業改善も支援

が3年間受け持った2年前の卒業生だった。「卒業生であれば、本校のことをよく知っていますし、私たちは卒業生の人柄を知り尽くしているので、安心して仕事を任せられます。教師の業務負担軽減に加えて、教師を目指す卒業生は学校の仕事を経験でき、そして、自分の目標に向けて励む卒業生の姿は生徒のロールモデルとなり、生徒が進路について深く考えることにつながると考えました。教師・大学生・生徒がWin-Win-Winの制度にしたいと思いました」

同校では、22年度、ICT支援員として、ICTに詳しい愛媛大学工学部2年生1人を、サポーターとして、愛媛大学教育学部2年生の4人と同大学法文学部2年生の1人を採用した。

ICT支援員の仕事は、ICTの活用に関

の模擬試験監督など、多岐にわたる。サポーターの里見綾華さんの初仕事は、伝統行事のリレー・綱引き大会の補助だった。

「初めて教師側の立場で学校行事に参加し、幾つもの種目が時間通りに進められていたのは、先生方や生徒会役員が入念に準備していたからだったのだと気づきました」（里見さん）

また、家庭科の教師を目指す里見さんは、徳本先生が家庭科の授業で行う課題研究を補助している。SDGsについて学んだことを絵本にする課題では、生徒に提示する見本の絵本を里見さんが作成した。

学校家庭クラブ（家庭科で学んだ知識・技能を実践する課外活動）では、クラブ顧問の



写真 「情報I」の授業で、生徒の質問に答える東野さん。授業改善の役に立つのではないかと考え、生徒からの質問や、生徒の理解が不十分だと感じた箇所などを書き留めたノートを、授業者に渡している。

徳本先生に代わり、同クラブのOGである里見さんが、生徒が金曜日の放課後に行う活動の準備を支援している。活動の内容をよく知る里見さんからのアドバイスによって作業が効率化し、その結果、以前よりも短い時間で準備することができるようになった。

研修用動画の作成や新機器の活用など、支援スタッフの挑戦が教師の刺激に

校内で共有する資料作りには、ICT支援員の東野さんのICTスキルが大いに役立っている。例えば、校内研修は、他の業務の関係で参加できない教師が少なくない。そこで、プログラミング教材の使用方法を説明する校内研修を行った際、東野さんにその様子を撮影して10分程度の動画に編集してもらい、プログラミング教材の使用マニュアル動画として、研修に参加できなかった教師が好きな時間に見られるようにした。視聴した教師からは、「分かりやすい」「業務の効率化につながった」などと好評だった。

「ICT支援員だからこそ、新しいことに挑戦するようにしています。例えば、今年度、3Dプリンターが配備されましたが、先生方は忙しくて、使う時間を取れずいました。そこで、私が使用マニュアルを作ったところ、『生徒が3Dプリンターで制作したものを文

進路指導課長

松田 猛 まつた・たけし

教職歴26年。同校に赴任して5年目。進路指導研究指定推進委員。数学科。

SSH推進課長

若山 勇太 わかやま・ゆうた

教職歴19年。同校に赴任して5年目。STEAM教育推進委員。理科。

SSH推進課

徳本 みはる とくもと・みはる

教職歴26年。同校に赴任して9年目。授業改善推進委員。家庭科、情報科。

図書・情報課

須之内 智彦 すのうち・ともひこ

教職歴12年。同校に赴任して3年目。ICT活用推進委員。地理歴史・公民科。

ICT教育支援員

東野 亨省 ひがしの・こうせい

愛媛大学工学部2年。

大学生スクールサポーター

里見 綾華 さとみ・あやか

愛媛大学教育学部2年。

化祭に展示してはどうか」といったアイデアが先生方から出てきました。私が思い切った行なったことから、新しい取り組みが生まれ、広がっていくところにも、ICT支援員の仕事にやりがいを感じています」（東野さん）

大学生の頑張る姿が教師にとって大きな刺激になっていると、SSH推進課長の若山勇太先生は語る。

「私たちは、大学生の活躍に、未来の教師の姿を見ているような気がしています。例えば、授業で使うプリントの印刷を頼むと、複数枚ある場合には、教師の配る手間を省き、手に取った生徒が整理しやすいよう、1人分ずつまとめて折って折ってくれています。よりよい方法を考えてチャレンジする姿に、未来の教師への期待が膨らむ一方で、有望な教師の卵が私たちの背中を見ていることに、よい意味でのプレッシャーも感じ、背筋が伸びる思いです」

生徒が、大学生から受ける刺激も大きい。学校行事や部活動などで時間をともにする中で、大学生は、生徒に学生生活について話したり、生徒からの学習の質問に答えたりしている。時には、1時間以上話し込むことがあると言う。図書・情報課の須之内智彦先生は次のように述べる。

「生徒が大学生と日常的に話すことは、学習意欲や進路意識の向上の面でもメリットが大きいのと思っています。また、大学生は、私たち教師の姿を見て、仕事を一生懸命覚えようとしています。生徒はそうした大学生を頼もしく思っているようで、よく相談をしたり、勉強を教わったりしています」

変革の成果・展望

業務の負担軽減を実感する教師 進路指導等での支援スタッフの活用を検討

ICT支援員やサポーターが配置されてから半年が経ち、教師は業務の負担軽減を徐々に実感している。SSHの課題研究・教科横断型授業、ICTを活用した授業の準備や改善に、教師が取り組みやすくなった一方、大学生にとっては、母校での経験が自身の成長のステップになっている。

「先生方の授業の進め方を間近で見ることができると、普通のアルバイトではできない経験を積んでいます。様々な業務がありながら、生徒の相談に乗ったり、部活動の指導をしたりと、教師の大変さを実感しています。これからも、先生方のどんな負担をどうすれば減らすことができるかを考え、私自身も成長していきたいと思っています」(東野さん)

「生徒から『ありがとうございます』と言われることが、何よりもうれしいです。私がかかわることで、生徒が新しいことができるようになっていく姿を見るのも楽しみです。教師になりたいという思いがさらに強くなりました」(里見さん)

今後の課題は、大学生の力を、教師の業務

補助だけでなく、進路指導などにもいかに活用していくかと、須之内先生は語る。

「業務補助の仕事には限りがありますが、大学生の力による教育活動の活性化には、無限の可能性があると思っています。3Dプリンターについても、東野さんが率先して使い方を示してくれたおかげで、文化祭での活用のアイデアが浮かび、実現しました。教師と大学生の力がともに発揮され、それが相乗効果を生むことで、生徒の可能性がさらに広がっていくと期待しています」

ICT支援員やサポーターが配置された効果を可視化することも、制度の継続・拡大のためには必要だ。制度導入後、教師の負担がどの程度軽減されたのか、生徒にどんな影響をもたらしたのか、大学生はどのように成長したのかといった効果検証を、アンケートを実施するなどして行う予定だ。

「大学生の活用は始まったばかりで、暗中模索のさなかですが、今後、大学入試に向けた模擬面接や、グループディスカッションの練習、志望理由書作成の指導などへの活用を考えています。このありがたい制度が次年度以降も続くよう、私たちがモデルケースをつくって紹介することで、制度が広く知れ渡り、多くの学校に浸透していくことを期待しています」(松田先生)